

墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（五） -第三編上帙-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2018-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 神田, 正行 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19251

墨川亭雪麿『傾城三国志』翻刻（五）——第三編上帙——

神田 正行

凡例

- 一、仮名は一部を除いて、ひらがなに統一した。また、会話を示す「」や、句読・濁点などを適宜補った。
- 一、読み誤りのない範囲で漢字を宛てた。その際、もとの表記を傍訓で残したものもある。また、原本における振り仮名は、一部を除き省略した。
- 一、文章を読む順序を示した「合印^{あひしるし}」は、その多くを形の近い記号で代用した。
- 一、本文には、内容にもとづいて適宜段落を設けた。また、「巻（五丁の単位）」ごとに改段を施した。
- 一、見開きが改まる位置には、「（4ウ・5オ）」の形で丁数を示した。
- 一、各人物が初めて、もしくは久々に登場する場面では、原作『通俗三国志』の相当する人物を【】内に注記した。また一部の地名や事物についても、同様の処置を行なった。「▼」印以下は、稿者による注記である。
- 一、影印ならびに翻刻の底本には、早印本と思われる明治大学図書館（江戸文芸文庫）蔵本を用いた。

▼一丁表欄上に、巻次を示す「(巻)」。

傾城三国志第三編序 每編八巻 合本四冊

『鞍耕録』画家十三科中に、金剛鬼神羅漢聖僧、花竹翎毛、野驃走獸、人間動用、界画樓台、此余猶くさくあり。金剛鬼神の異形なる、野驃走獸の勢あるは、名人巧手に非ずとも、大概に画得たらば、謗人なんなかるべし。人間動用の目前なる様は、名人高手といふと雖、聊協はざる所あれば、人とりとくに譏るべし。『源氏』帚木の巻にも「人の見及ばぬほうらいの山、あら海のいかれるいをのすがた、からくにのはげしきけだものゝかたち、めにみへぬをにのかほなどの おどろくしくつくりたるものは、心にまかせてひときは人のめをおどろかして、じちにはにざらめどさてありぬべし。」云云書たり。稗官者流も是と一般。怪談妄説は繚得安く、人情世態を摸んは、容易らざる業にして、斯でもあるまい然でもない、と人の批判は請合療治、馬鹿に附る業は有共、好きな病に勝れぬとは、嗚呼苦々しき戯作の一癖。書賈日を期て索る事ある時は、通一負に異す。案に對て

摺墨は、天窓にひゞきて頭痛抹額、虚火中に攻飯に對して食れず。体貌早く衰ても、枉て精神を費て、人に一刻の歡を供ふる、真に何の益かあらん、と想ふには何ぞ何といふ、物、数寄屋町の墨春亭は、吾門に遊びつゝ、終に戯作者の魔界に墮す。頃日菴を訪ふて、「先生お作の『三国志』に、傾城の二字は冠ながら、いまだ傾城と呼ぶの根由を聴す。こは漫言の標題にて、「女三国志」といふべきを、色気持せて彼文字、腹は素より空蟬の、売か左なき歎甚麼ぞや。」と問ふに僕、曰、「此冊子の本拠とする、『演義三国志』第十五回なる、司徒王允説貂蟬条に、貂蟬が上をいひて、「顔色傾城年当十八」云云と有、総て女美容を、傾城といふを見ずや。原貂蟬は歌舞吹弾の、菜女には有ながら、歌妓遊女をのみ傾城と、限りいふには有べからず。諸美女を男の事に摸擬せし、賽三国志なることは、いはでも看官の御承知にて、今更いふは愚痴なり。」と新内節の文句めく、答をなしてお茶を濁つ、当日の言を序に換て、簡端の余紙を塞といふ。

天保三壬辰春新版

墨川亭雪麿誌

卷下の引用に基づくものであろう。

〔略注〕

◆『輟耕録』↓元末明初の陶宗儀の隨筆（和刻本あり）。三十卷。「画家十三科」の項は、卷二十八の末尾にあり、「仏菩薩相、玉帝君王道相、金剛鬼神羅漢聖僧、風雲龍虎、宿世人物、全境山林、花竹翎毛、野驃走獸、人間動用、界画樓台、一切傍生、耕種機織、雕青嵌緑」の十三科を列挙する。

◆『源氏』帚木の卷↓引用は、いわゆる「雨夜の品定め」における、左馬頭の言葉。

◆裨官者流↓戯作者。『漢書』芸文志の「小説家者流、蓋出_シ於裨官_ニ」に由来する。

◆通一負_シ↓以下、譚元春「答李長叔表兄書」に、「刻期追索、有如通一負、虛火攻中、对飯不食。常自思惟日月逝於上、体貌衰於下、前有未了之事、現有当卜之歎、而枉費精神、供人一刻之求、真有何益」とあるのを踏まえる。おそらくは、『南畝莠言』（文化十四年刊）

◆墨春亭↓春廼舎梅麿（一八一八〜四四）。

◆『演義三国志』第十五回↓「司徒王允説貂蟬」の一段は、現行の百二十回本では第八回。『通俗三国志』では卷三にあるが、同書は「回」を立てない。雪麿の記述に一致するのは、京都大学図書館に蔵される『二刻英雄譜』（同大学漢籍善本叢書に影印）で、同本の卷二に「司徒王允説貂蟬第十五回」の見出しがある。雪麿は、基本的に通俗本を用いて本作の編述を進めたと思われるが、部分的には『英雄譜』系統の唐本をも参照したらしい。

◆顔色傾城年当十八云云↓『二刻英雄譜』第十五回に、「允（王允）見其聡明、教以歌舞吹彈、一通百達、九流三教、無所不知、顔色傾城、年当十八」とある（影印本第一卷、一〇九頁）。なお、馬琴の所持した『三国志伝評林』（早大曲亭叢書。「回」を立てない）卷二では、貂蟬の年齢が「年当二十」となっている。



《一丁裏・二丁表》

ひきもの、はなご
牽物 華籠【華雄】

なまがはのたつり
玉川 調布【呂布】

▼駒絵内「呂布」。

はらすゑのよめからも、
董根 嫁杏【李儒】

▼駒絵内「李儒」。

とじたかのごしゅうからるまゝ
敏貴 扈從 唐 綾丸【唐妃】

《二丁裏・三丁表》



新関守宮居【陳宮】

平 義将 妾 柏木【呂伯奢】

▼駒絵内「呂伯奢」。

初糸 妹 色糸【袁術】

▼駒絵内「袁術」。

市肆 鮑【鮑信】



秋山黄葉【黄蓋】

▼駒絵内「黄蓋」。以下、堅田【孫権】配下の四将。

冬川行船【程晋】

夏木立茂枝【祖茂】

春雨海棠【韓当】

▼駒絵内「韓当」。



(4ウ・5オ 董根、弁姫を退ける)

さる程に董根【董卓】は、外面【周慮】・村雨【蔡

篋】らが言葉を聞き、「理あり」と思ふになん、初糸【袁紹】が事はそがまゝ差し置き、権威はいよゝますゝ強く、御殿にあるとある者どもは、みな戦き怖れける。

その年もはや菊月の、朔日となりけるが、この日董根は弁姫【少帝】の、御前に人を召し集へ、次第を正して座せしめつゝ、自ら席の中央に、進み出で、座中を見直し、憚る色なく言ひけるは、「今日しもかく各々方を、召し集へしは私の、ことをはかるにあらずかし。その訳いかにとなれば、そも〱御霊姫【霊帝】のおん事は、父大臣に似給はず、おん身の幸薄うして、早く此世を去り給ふ。▲〱今弁姫のおん性鈍くて、全く御殿のまつりごとを、任せ奉る〱〱べうもおほえず。ごうとく

▼「凶徳」か。通俗本の「天郊の策文」に「凶徳既彰」とある】すでに現るゝ。しかのみならず往ぬる頃、御宝の短刀を失ひ給ひて、東の御殿の右へ〱左より悪しきねざしを表はし給ふ。それに代はりて協姫【猷帝】は、おん性聡く下みな懐けり。今より御殿に据へ参らして、

人の望みを叶へなん」と、言ひつゝ、左右を見返りて、ありあふ者に下知をなし、弁姫を上座より、引下げて坐の下につけ、「これよりの後内侍司の、格にてあまたの宮人と、等しく仕へ申せ」とある、言葉聞いて弁姫、「妾たらはぬ身なれども、あまたの人に傳かれ、育てられたる身なりしを、うたてや今より諸人と、ともに習はぬ宮仕へを、せんとは思ひかけざりき」と、袂を顔におし当て、いたく嘆かせ給ふにぞ、この坐に連なる女房たち



（5ウ 菅原、奮戦する）

も、絞らぬ袖はなかりける。

董根はさる気色もなく、又席上に連なりたる、藤の敏貴【何貴人】は弁姫の、まことの父なりければ、是を召し出で装束解かせ、席末に追ひ下せば、女子に等しき優男、ものも言ひえず次へ（4ウ・5オ）／続きさめくと泣き、かたへに臥して正体なければ、人みな件のありさまに、催されつゝ泣きしほるゝ、折から遙かあなたなる、階のもとにいるたる、女房菅原【丁管】と呼べる者、憤りに堪へずやありけん、けたなる眼をいからして、「あな憎き盗人女よ。おのれ董根天を欺き、いともかしこき姫上の、御座をおし下げ参らすは、憎みてもなほ余りあり。おのれと共に死なんものを」と、大声に呼ばはりつゝ、■懐剣を抜き持つて、董根めがけて突きかゝれば、董根も大きに怒り、「しや小賢しきあの痴れ者。誰かある引き出だして、とく打ち殺せ」と息巻けば、「あつ」と応へてたちかゝる、下衆女房らをかい投げかいたり、なをも罵りやますして、菅原は董根の、□／□傍ら近く寄らんとするを、手取り足取り大勢にて、つひ

に組み敷き広庭へ、引出だし無惨にも、頭かうべを刎ねて捨てたりしが、その折までも菅原は、面おもての色さへ変へざるは、魂すはりし女かなと、様子を見たる女房ら、戦まのき怖るゝその中にも、心の内に感じける。董根がかく非道なる、ふるまひをなしぬるも、わが威をよそへ示さんの、はかりごとゝ知られたり。

二の巻へ

(二)

卷の巻よりこと果てゝのち董根は、協姫をもり参らせ、御簾を垂れたる上段の、設けの席へ招せうじ入るれば、みな万歳ばんざいを唱へつゝ、これよりのちは協姫を、東の御殿おとどと称へ申し、董根専もつぱら我意を振るひて、おのがまゝを働くあまりに、弁姫を敏貴みんきが、別殿へ押し籠めまいらせ、おん傍らに従ふ者は、唐綾丸からあやまる【唐妃】と呼ぶ童小姓わらはの、かねて敏貴に仕へし者と、他には腰元ふたり二人にて、朝夕仕へ申すのみ。よろづに不自由がちにして、心細さはいかならん、あはれはこゝの秋にあり。しかのみならず誰たれなりとも、みだりに此館へは、入る事を許されず。もしその旨たまに違ふ者は、その身はさら世親うからやから族も、誅せらるゝとの掟なれば、心に思ふ者ありとも、 誰たれありて犯す者なし。痛ましいかな弁姫、卯月の頃は御殿おとどに据へられ、九月に至りて董根が、ためにかくまで憂き目をば、三月みつき四月よつきの夕日影、たちやす〇／〇ければ夢と過ぎ、明くれば春の長き日を、いかに暮らさんの憂さを、忘るゝよすがなき明かす、姫・敏貴を慰めかぬる、唐綾からあやともに憂



（6才）弁姫、燕を詠ずる

き嘆き、衣服はさらなり毎日の、食事をさへに省かれ給ひ、いとかすかなるおん暮らし、姫は涙におん袂、乾く時なく見え給ひしが、ある日ふと燕つばねの、館の内に飛び入りしを、うち見やり給ひしが、とりあへず一首を詠じ給ひ、おん筆を染め給ふ。

〔燕つばね なれも古巢を次へ〕（6才）／〔続き捨て果てて

身や墨染めのさまに変えけん
かく口ずさみ給ひつゝ、筆投げ捨ててよゝと泣き、□

／□「言ひ甲斐もなき此世を捨て、尼法師に姿を変え、後の世をこそ助からめ」と、幼心こころに世を憐み、恨み給ふぞ道理なる。

董根常々この館に、中へ／上より仕ふる腰元の女をば、我が手につけおき秘やかに、その様子を探り聞しが、此日かの腰元来たりて、件の歌の物語を、逐一に告げしかば、董根心にうち領き、「弁姫我がするところを、恨みてかゝる右へ／左より歌をも詠めるは、かへつて此方の幸ひ也。これを殺すに名ありといはんか。誰かある、嫁杏かもの【李儒】を呼び来たれ」と言ひつくれば、走り使ひの僕もろとも、たちまち杏が来にければ、董根は杏に、そのよしを語り機密を告げて、弁姫を殺さしむ。杏はその旨を受けて、三人ばかりの僕らに、割籠小筒をとり持たせ、弁姫が住み給ふ、敏貴の別殿へ、行きて「今日しも杏が、董根の局が命を受け、御機嫌をうかがひぬ」と、言ひ入れさせたるその折しも、姫は敏貴・唐綾丸と、ともに楼たかどに給ひて、心慰むこともやと、眺むるかたは山青く、山白うして行き来する、雲に上見ぬ驚



（6ウ・7オ 杏、弁姫のもとへ来たる）

の尾は、人の上にて澄み濁る、音羽の滝の訪れも、問ふ人もなき我が身かな。後の世助け給へやと、経書く塔や泰産寺、子安の塔といふからに、せめて姫のみ■／＼安かれと、父が迷ひは六道の、辻占に忌む地獄道、冥土に通ふ鳥辺山、身の禍を知らずのか、にはかに胸は轟のはしなく来たる腰元が、遙かあなたに手をつかえ、杏が来たれるよしを、言ふに姫上・敏貴は、「思ひがけなき人は来ぬ。いかなる子細なるべき」と、深く案じてる給ふ所へ、杏小筒もたらし来て、「董根の刀自妾をもつて、今日しも姫への捧げ物は、珍しからず候へど、濃き薬酒ひと徳利に、ちとの御肴を添えぬれば、聞こし召されて次へ（6ウ・7オ）／＼続き春の日の、長気鬱をも散じをはせと、厚き心で奉る。とく／＼開き給へかし」と、何気なき体にもてなせど、弁姫も敏貴も、董根が贈り物と、聞くよりぞつと怖気たち、疑ひ惑へばとりあへず、応へだにもし給はぬを、杏、「色目を悟られぬ」と、思へば強いて御前に、小筒を取りてさしつけつ、「いざ／＼きこし召されよ」と、言ひ促せば弁姫、「何とてかくまで妾

（7ウ・8オ 杏 弁姫らに死を迫る）



に迫り、強いて酒をば勧むるならん」と、訝り給へば◆
 ◆杏は、「こも世の常の酒なれば、さのみ疑ひ給ふこ
 とかは。とくく」となを押しやるを、敏貴はそばより
 支へて、「疑ひのなき酒ならば、おことまづ試みして、
 のちにこそ勧むべし」と、言へば杏たちまち怒りて、か
 ねてかうとや思ひけん、隠し持ちたる短刀を、ひらりと
 抜いて親と子が、目先に閃かし、「察することく此酒は、
 鳩毒ちんぞくを加へし酒也。一杯を飲みえずは、一振りの刀を吞
 め」と、なを閃かす傍若無人、危ふかりけるかたはらよ
 り、唐綾丸は膝を進み、杏が前に跪ひざまづき、「おんいたはし
 や、ふたかた二方をさな責めそ。もしその酒を、飲までかなはぬ
 ことならば、それがし代はりてこれを飲みなん。望むら
 くは□／□おん二方の、おん命を助け給へ」と、言はし
 もあへず杏は、唐綾丸を尻目にかけて、「いかなれば汝小
 差し出で、わがすることを妨げて、◇／◇姫が命に代は
 ると言ふや。聞くも烏澁せこなる業わざなり」と、言ひつゝ、毒酒
 を盃さかづきに、酌みて敏貴に与へつゝ、「辞宜をするにもよき
 程あり。御身から此盃は、はじめて順に回すべし。酔えひ



(8ウ・9オ 杏 弁姫らを殺める)

が回らば目も回らん。味は甘露で腸へ、しみく礼を言ふ間もなく、すぐさま命はないと小積もり、夢の此世の酔ひ醒めに、水はあの世で飲むべし」と、嘲り言へば敏貴は、歯を噛み胸をうち叩き、逆立つ眼に涙はあふれ、「たゞ恨めしきは母香取【何進】、益もなき董根を、御殿の内に引入れて、今日の憂き目を見せぬるよ」と、口説き嘆くを杏は、耳にも入れず次へ(7ウ・8オ)／

続きかの酒を、姫・敏貴に「飲むべし」と、促し迫るに敏貴も、唐綾丸も姫が手を、左より又右より取り、抱き合いて泣き沈む。

杏は気を苛ち、「董根の刀自妾が帰って、返事申すを待ちてぞをはさん。なんたちなどてべんく」と、事を延ばして埒をあげぬや。聞こえたりそのうちに、誰か来りて救ひもするやと、空頼めこそをかしけれ」と、言へば敏貴身を震はし、「憎みてもなを憎むべきは、董根の局ぞかし。かゝる非道を行ひて、姫それがしを殺さんと、はかるをいかでか天道も、助け給はんいはれなし。汝らまさしく唐土の、紂王の悪を助けし、ともがらに等しか

るべし。必ず親族まで、天道左へ右より罪し給はんこと、疑ひもなく見ゆるかし」と、杏を指させば、杏怒りて双の手に、力を込めて敏貴を、むづと捉へて振り回し、無惨なるかな樓より、遙かの下へ投げ落とす。中へ

上より弁姫は杏の、裳裾へしかとたぐりつくを、「手にも足らざる小女郎めが」と、もつたいなくも足もて蹴飛ばし、唐綾丸をもおし据ゑて、従へ来たりし右へ左

より僕を近付け、「それく」と目をくはずれば、心得はてて一人の僕は、唐綾が喉首を、おのれが着たる袴の紐を、まとひて遂に絞め殺せり。その余の僕二人にて、弁姫をおし仰向け、かの毒酒をおん口に、注ぎ入るれば痛ましや、空を掴みて七転八倒、いとあへなくも奸婦らが、毒酒にかゝりて死し給ふは、あはれはかなきことなりかし。これしかしながら往ぬる頃、敏貴がもの嫉みにて、藤原美容【玉美人】に、毒を飼いて殺したる、もの報ひと知られたり。

杏は董根に、姫をはじめ三人まで、殺し尽くせしその旨を、逐一に告げしかば、董根大きに喜びて、かの人々

の死骸をば、引き出して鳥辺野へ、秘かに埋み隠しける。

これより夜ごとに董根は、館にありとあるところの、男董の愛らしき、あるひは見目よき若男と、ほしいまゝに姦淫なし、酒食にのみ耽りつゝ、常のすゞる歩きにも、前駆次へ（8ウ・9オ）／続き後従の供人に、圍繞せられざることなく、ある時如月の末なりしが、菅丞相道真公、筑紫に薨じ給ひし日とて、都近き在所より、賤の男女うち群れ来たりて、洛中の寺々に、詣でつゝ念仏して、かの丞相のおん跡を、弔ひ参らする折節に、董根そこへゆきあはせ、従者僕らに言ひ付けて、女子といへばみなことごとく、みなおし並べて無体に殺させ、男は老も若きも選まず、捕らへさせて連れ帰り、あるひは金銭衣服持ち物、ことごとく掠め取り、しかのみならず殺したる、女が首をみな刎ねて、これを車に積み持て帰りて、鳥辺野にて焼き失ひ、かの連れ帰りし男ども、その他掠めし金銀衣服は、おのが手につき従ふ、女房らに分かち与へ、淫を貪らしめたるは、架紘が暴悪も、これには過ぎじと見えにけり。



(9ウ・10オ) 董根、庶民を虐殺する

董根かゝる悪行非道を、働きてやまざれども、御殿の内なるあまたの女房、みなく戦き怖れつゝ、いかにともせん術なきに、服部の命婦五百機【伍字】は、志ある者なりければ、かねて董根を憎みつゝ、懐刀を隠し持ち、董根が御殿に入るを、朝夕心をつけてをり。さありとも悟らねば、何心なく董根は、今日しも御殿に入り来たり、静かに歩む広廂、屏風の陰より五百機は、たち出でて董根を迎へ、伴ふふりに見せかけて、懐刀抜く手も見せず、閃き渡る稲妻がたの、紗綾の白無垢

○下へ

／＼上より袂を掲げ、胸元目がけて突きかくるを、董根は胆太く、力勝りし女なれば、不意を打たれてこともせず、白刃を左右へ突きそらせ、大手を広げて五百機を、取りとゞめんと焦るところへ、調布【呂布】がつと駆け来たり、「妾が力を添へ申さん」と、言ひながら五百機に、立ち向かひしが手もなくこれを、取つて押さへてねぢ伏せたり。董根は嘲り笑ひ、五百機にうち向かひて、「何人かおのれに教えて、この叛逆をなさしめたる。

次へ (9ウ・10オ) / 続き包まずにみなまけ出だせ」と、



(10ウ 五百機、董根を襲う)

さも憎さげに問ひかくれば、五百機顔をすかし見て、「こは訝しき口上かな。おのれは妾の主にもあらねば、妾おのれが家来にあらず。何の道理を踏み違へて、叛逆とは言ふやらん。おのれ東の御殿の為に、いたく障りになる者にて、悪逆日々に重なれども、いかにせん誰ありて、拒み支ゆる者もなく、天にはびこる非道の行ひ。妾はおのれが下風に立つを、厭ふて死せんと思ふがゆゑに、**下へ** **上より** 諺にいふ行きがけの、駄賃とやらんお

喜鶴堂新奇趣向蔵梓目

水滸傳豪傑大雙六 奉書三枚繪
 歌川國芳画

東海道中 奉書三枚繪
 五十三次 大雙六
 本奉書三枚繪
 名所名物文

風懷中將某 本地本
 團扇 問屋
 先野屋書士衛枝

東千代市御進物御箱合目 本地
 奉書三枚繪

▼奥目録「喜鶴堂新奇趣向蔵梓目」。

《第一冊 後表紙封面》

のれが頭を、閻魔の庁へ手土産と、思ひしものを思ひきや、やみく手籠めにならんとは。たゞ残り多きはおのれが屍を、引裂きて市に捨て、諸人にも喜びの、眉を開かせざるのみ也」と、しばらく罵りやまざりけり。

(10ウ)

《第二冊 表紙》



傾城三國志三編

上帙下冊 喜鶴堂梓

壬辰新刊

王允 ▼ 駒絵内。中央は本作の千束

雪麿作 国貞画

《第二冊 前表紙見返し》



雪麿編述

生日に仮托し東道儲は恋ならで 人をば

国貞画圖

口説く艶書の 千束が家に密の会合

傾城三國志三編之二

壬辰刊行 欣そこねたる名刀の 七宝丸から

喜雀堂記 八方を とり囲たる浜名の新聞

▼中央の題号は濃墨。左右の地に藍風色を使用する。

(三)

その時董根は、怒れる眼にはつたと睨み、それごとく目をくはずれば、調布心得館の内を、引き出だして苛み殺すに、五百機罵りやまずして、非業の最期を遂げたりしを、惜しまぬ者なかりける。董根はこれよりして、常に用心堅固にて、数多の人にひきまとはれ、館へ出で入りせしとなり。

こゝにまた初糸【袁紹】は、董根がかくばかり、東の



(11オ) 初糸、千束に使者を送る

御殿に羽をのしはびこり、權威をほしいまゝにするよしを、聞くさへいよ、腹立しく、いかにせましと思案をめぐらし、文認めて相知れる、千束【王允】がもとへ言ひやりけるは、「董根天を欺きて、弁姫の御座をすべらし、みだりに御殿の内に寝臥して、誰憚ることもなく、言ふに忍びぬ業なりかし。君を助くる神もなく、ますく彼が
 ■御殿の内に、踏みはだかるを助け給へり。妾初糸、兵どもを招き集め、馬に繫かけ彼がために、穢され給ふ東の御殿を、清めんと思へども、○／○ことを危ぶむものからに、軽々しくはなしえざりき。御身は久しく館に仕えて、恩を担ひし人なれば、隙をうかゞひ弊えに乗りて、これをはかり給はんことを、思へば秘かに使ひをまるらし、
 次へ(11オ)／続き御身が胸を聞かんと思へり。筆にはことを言ひ尽くさす。願ふは察し給へかし。あなかしこ」とぞ
 書いたりける。千束は文を読み終はり、とやかう思ひ巡らせど、謀とてまなかりけり。ある日御殿に諸々の、女房たちの集ひたる、小座敷をうかゞひ見れば、御霊姫の御時より、古く仕ふる人々な



(11ウ・12オ 千束、酒宴を催す)

れば、千束は一間にうち通り、よもやまの話のなへに、女房たちにうち向かひ、「言ふも烏滸なるわざながら、今日しも妾が誕生日にて、今宵は少しく暇を得たり。厭はしからず思し給はゞ、我が家に駕を曲げ給はずや。何はなくとも酒を勧めん。館を退出給はん帰るさ、平に立ち寄り給へ」と言ふに、諸人口を揃へつ、「こは思ひがけもなく、口に果報のあることよ。必ず参りて寿を、添へ参らせん」と応へをすれば、千束は喜び座を退き、やがておのれが宿に帰りつ、種々の肴をまうけ、裏座敷に寿の、筵を開きて灯火は、熒煌として輝けり。諸人やがて入り来り、各々坐になほりし折から、千束は立ち出で礼あつく、○／＼まづ杯をすゝめつ、「かううち揃ひ給ひしは、御霊姫の御時より、交はり厚き友がきにて、殊にいづれも兼ねてより、●／＼期せずしてふと集ひたりしは、又ありがたき嘉会にこそ。喜びこれに増すことなし」と、さまざまにもてなしつ、酒たけなはに及びし頃、○／＼千束も共に杯を、あげて干さんとしたりしが、にはかに面をうち覆ひ、声を放ちてよゝと泣く。

諸人驚き言ひけるは、「今宵は御身が誕生日にて、めでたかるべき時なるに、嘆き給ふは訝し」と、言へば千束は頭をうち振り、「いな／＼次へ（11ウ・12オ）／続きまことは今宵、妾が誕生日にはあらずかし。各々を集へんと思へども、董根が疑ひを、生せんことを怖るゝものから、わざと誕生日にかこつたり。又我が嘆くは東の御殿を、悼み悲しむ余りなり。今董根が勢ひは、あたかも水の激することく、各々朝夕の上をさへ、頼みかねたるさまならずや。かしこくも左の大臣【▼藤原時平】、御家長久の▲上へ／＼右の中より基を開かれ、此館を嘗み給ひて、はやいくばくの年月を、過ごしてこゝに三代の君、受け継ぎ給ふ御館、董根の手に失はんは、いと口惜しきことならずや。我が輩命を捨てても、かつて御殿に益あらず」と、聞いて同じく諸人も、袂を顔におし当てて、等しく嘆くそが中に、一人手を打ち笑みかたまけて、「御殿にありとある所の、官女たち泣きむつかりて、夜は終夜明くるに及び、昼は終日暮るゝに至れど、限りもあらずうち泣き給ふは、董根を■／＼殺すをば、

悼みて嘆き給ふにや」と、言ふ顔千束はうちまもり、「御身は滝夜刃姫【曹操】ならずや。今かく我々を嘲るは、賊婦董根に心を寄せ、今宵の様を彼に告げんと、思ひてのことなるや」と、言へば滝夜刃容を改め、「こはあらず、諸々の女房たち、此席に並みみる給ひて、一ツの謀をだに、え設け給はぬを笑ふのみ。妾賢からずといへども、少しく謀を施して、董根が頭を刎ね、きのそら【▼ママ。原作「都ノ門」】に懸け諸人に、謝せんこと難きにあらず」と、聞て千束は席を換え、滝夜刃姫を小陰に招き、「御身に優れし料簡あらば、そをもて東の御殿を助けよ」と、言ふに滝夜刃声を潜め、「妾近ごろ身を卑しめて、董根に仕ふるも、まことは心彼を計り、落とさんと思ふにあり。董根もつばら妾を愛して、ことある時は必ずしも、相談せずといふことなし。御身が家には一振りの、稀代の刀を収むと聞ぬ。願ふはかのひと振りをも、貸し与へ給はらば、自ら董根が居間に入りて、彼を刺し殺すべし。万に一つ首尾ならず、妾死ぬること



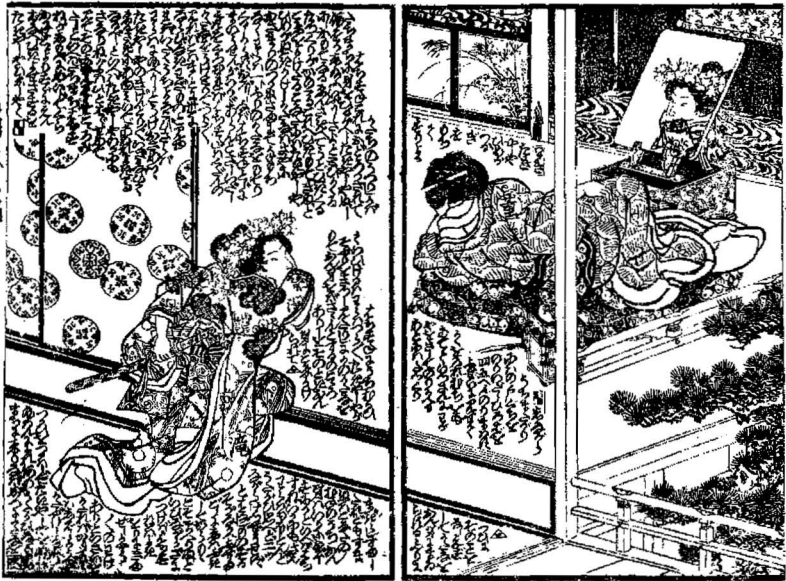
(12ウ・13オ 千束、滝夜刃に宝剣を貸し与える)

ありとも、かつて恨みとせざる也」と、言ふに千束は喜
 びて、「御身果たしてさる心あるは、東の御殿にとりて、
 こよなき幸ひといふべからん」と、言ひつゝ、かの次へ
 (12ウ・13オ) / 続き剣をとう出で、滝夜刃姫に与ふれ
 ば、滝夜刃これを受けをさめ、千束の前に誓ひを▲ / ▲
 立て、やがてぞこれを帯びたりけり。そも此剣は尺に余
 りて、焼き刃鉄色いふばかりなく、極めて鋭きわざもの
 にて、金銀瑠璃碑礫瑠璃の類もて、拵へとなしければ、
 七宝丸と名付けたり。◆ / ◆かくてその余の女房らも、
 千束が扱ひ等閑ならず、みな十二分の酔ひを催し、やゝ
 久しくして退出しは、はや鳥の鳴くころ也けり。
 滝夜刃姫は明るる朝、巳の刻ばかりに董根が、もとに
 至りて◇ / ◇局が安否を、問ふに腰元指さし示して、
 「董根の刀自早くより、あれなる小座敷に入をはして、
 物語し給ひぬ」と、言ふに滝夜刃そがまゝに、座敷に入
 て対面す。▲ / ▲董根は裯の上に、ゆるやかに座を占め
 て、調布はかたへに侍り、話の最中と見へければ、○ / ○
 滝夜刃姫もうちまじりて、よもやまの物語に、しばら



(13ウ・14オ 滝夜叉、董根と対面する)

く時を移せしに、ふと董根が言ひ出でけるは、「世は穩やかに右へ左よりなりぬとも、油断のならぬ人心、今日睦ましく物語れど、明日は異越の思ひをなして、やゝもすれば争ひを、引出だす習ひなれば、用心にしくはなし。滝夜叉御身はもとよりも、歴々の姫にてをせば、馬物の具の用意には、疎かならぬはづながら、我が身一匹の良馬を繋げり。これを御身に参らせん。調布とくくかの馬を、牽きもて来たりて参らせよ」と、言へば調布心得て、やがて座を立ち外の方へ、出でゆくを見て滝夜叉は、兼ねて期したることなれば、「こゝぞ董根を殺すには、よき潮合い」と思案を極め、刀を抜かんと思へども、常より彼が力あるを、兼ねても知れば「なまじいに、し損なひてはかなはじ」と、たやすくは手を下さず。董根は世の常の、人にも増して肥えふくれ、久しく座するに堪へざれば、滝夜叉に会釈しつ、「許し給へ」と言ひながら、裯の上に身を横たへ、あなたに背けて臥しゐたる。滝夜叉「此期を逃さじ」と、刀をとつてそろくくと、身を近付けんとにじり寄る。董根が居間の内に



(14ウ・15オ 滝夜叉、董根を狙う)

は、常に姿見の鏡を置けば、此時丁度鏡の表へ、**次へ**
 (13ウ・14オ)／**続き**滝夜叉姫が剣を持ちて、すり寄るかたちの映りしかば、董根これに驚かされて、たちまちに身を翻し、「滝夜叉ぬし何をかし給ふ、訝しさよ」と問ひかくる、西表なる縁先へ、丁度牽き来る調布が、「かの馬これへ牽きもて来ぬ」と、声をかけたることには、滝夜叉姫が抜きかけし、刀は鞘に収まりの、つかぬさまにて手持ちなく、「妾一振りの刀を持てり。苦しからず思しなば、董根刀自に参らせん。いかゞあらん」と差し出だし、座をくろむれば董根は、件の刀を受け取りて、つらく見ればこはまことに、世に並びなき業物と、見ゆればいたくうち喜び、「さらば妾に給へかし」と、受け納めつ、滝夜叉の、機嫌とりく誘ひて、縁先に歩み出で、「あはれよき馬なるべし」と、言へば滝夜叉「いかにもさなり。願ふはひと馬場せめて見て、その駿足を試みまし」と、言へばたちまち董根が、僕に命じて鞍置かせ、こ、よりすぐに縁端へ、牽き寄せさするを滝夜叉は、会釈／＼しながらうち跨がり、庭の戸口を

乗り出だし、広場を四五遍乗り回す、風情に見せてかくを入れ、鞭をも当てて一散に、我が家をさして乗り帰る。あとには調布董根に、うち向かひて言ひけるは、「妾つら／＼滝夜刃が、素振りを察し見たりしに、かの刀をもて御身をば、刺んとするの心ありしを、その時御身に声かけられて、△／△つひにそのことをなし得ずして、刀を御身に参らする、ふりに紛らし済ましたれども、済まぬはこなたの胸の内。御身はいかに思すにか」と、言へ



（15ウ）杏、滝夜刃を疑う

ば董根「いかにもさ也。妾もほとんど疑ひ思へど、二ツながら決定せず」と、話しものするそが中へ、襖ごしに咳して、「杏」【李儒】こそまへりぬ」と、言ひながら座に着けば、董根は「よき折に来ませし。かやう／＼のわけあり」と、委細を語れば杏は、しばし頭を傾けしが、「今使ひを遣はして、滝夜刃を召し給はんに、彼何の疑ひなく、たちまちに来りなば、実に刀を次へ」（14ウ・15オ）／＼続き参らするに、疑ひはあらぬかし。もし又ものにかこつけて、参らぬ時はその心、御身を刺んとせしなれば、捕らへてこれを問ひ給へ」と、言ふに董根うち頷き、僕に言ひ付け呼ばするに、時移りて件の僕は、帰り参りて頭を下げ、「門番の武士申すには、『滝夜刃姫は馬に乗り、此門を出で給ふにより、ことよしを問ひしかば、御局の仰せに任せ、急なる用事のあるよし言ひ捨て、馬を飛ばして出で去れり』と、言ふをやつがれ聞あへず、すなはち宿所に至れども、はや何処へか行き方知れず」と、聞いて杏手を打ちて、「さてこそ急ぎ逃げたるなり」と、言へば董根大きに怒り、「妾彼をもて重く扱ふ

に、かへつて彼は害せんと、妾をするはいかにぞや。いと憎むべきことなり」とて、すなはち絵姿を写さしめ、

「此賊婦を捕らふる者は、恩賞乞ふに任せん」と、右へ

／＼左より遍くこれを触れながすに、杏が言ひけるは、

「彼と同じく計る者、なきことはあるべからず。滝夜刃をのみ早く捕らへば、自づから知るべきなり」とて、追つ手の者を手分けして、行方を深く探しける。

滝夜刃は董根を、刺んとしたる為体を、□／＼彼に悟られたりと思へば、「都に長居はかなふまじ。一たび

故郷へ帰らん」とて、昼は行き夜はとゞまり、行き／＼

て遠江国、浜名のほとりへ来にけるに、はや此わたり

へ董根が、下知下りてや新関を、構へて行き来の人を改め、いと嚴重に見えたりしが、滝夜刃のていをうかゞひ

見て、関守の僕おしとゞめ、「今都より下知下りて、相馬の将門が妹、滝夜刃といふ女を、吟味ある最中也。お

ことの模様をつらく見るに、その滝夜刃に疑ひなし。

四の巻へ (15ウ)

(四)

三の巻よりやはか此関を通すべきか。たゞしその名を名乗りて聞かさば、時宜によりて通すべし。とく／＼」

と苛立てば、滝夜刃はさり気なき、体にもてなし僕に向かひ、「妾はさる怖らしき、者にては侍らずかし。名を

ば江浦。▼曹操はここで皇甫姓を名乗る」と呼ばれつゝ、隣国三河の者にして、苦しからぬ者なれば、疑ひ晴らして

通さし給へ」と、聞くと等しく番所の内より、主だちたる一人の女、進み出でて言ひけるは、「いな争ひは無

益なり。妾都にありし故、滝夜刃といふことは、問はでも知るき汝が模様。心にしたゞめあるからは、いかで

か争ひをなさしめんや。それ／＼」と下知すれば、僕は立ち寄り滝夜刃を、おつ取り囲んで庭に引すゑ、縄もて

厳しく縛めたり。かの主だちたる女房が、うち向かひて言ひけるは、「妾汝を○／＼見知りてあれば、いかにして

隠しえん。汝を都へ差し出だせば、恩賞乞ふに任せんとの、ことなればその恩賞もて、前祝ひに僕らを、やが

もてなし得させん」と、あざみ笑ひて内に入り、僕ら

に下知げちをなし、滝夜刃姫を一間いっけんに閉ぢ籠め、厳しく番をつけおきて、さて酒肴さかなを多く用意し、僕らしもべに飲み食ひさせ、日の暮るゝをも知らざりしが、○印へ／＼○印より夜に入りて後のちと散らせし、酒肴をとり収め、大勢の僕らは、前後不覚に酔ひ倒れ、さらに正体なかりけり。

かの主おもだちたる女房は、滝夜刃をとり籠めおきたる、一間へ秘かに入り来り、うち寛ぎたる体ていにて言ふやう、「妾わが此ごろ仄かに聞くに、董根の局おこことをば、いと懇



（16才 杏、滝夜刃の絵姿を示す）

ろに取り扱ひ、給ひぬと聞きつるに、いかにしてかく身を忍び、都を立退くのみならず、厳しき詮議にあふ程の、身の災厄にはあふことぞ。次へ（16才）／＼続きそが訳聞かめ」と訝れば、滝夜刃につことうち笑ひ、「唐土の丈夫が、燕雀あんじやく何ぞ鴻鵠こうこくの、志こころざしを知らんと言ひき。おこと妾をかく捕らへて、やがて都に差し出だし、その恩賞を乞はんとすなるに、多く■／＼言葉を費して、我が上聞かきて何にかせん。そは益やくもなきことなり」と、背けし顔をか的女房は、●／＼さし覗きつゝ言ひけるは、「御身おんみが妾は知るまじ。妾も又志こころざし、なきことはあらねども、いかにせんその主を得ず。これ我が悲しむところぞや」と、聞いて滝夜刃容かたちを正し、「しか宜はゞ妾が素性を、御身に明かし聞かしむべし。妾は桓武天皇の三代、鎮守府將軍、平たいらの義將よしまさの嫡男、滝口新藏人、相馬の將門が右へ／＼左より妹いもにて、御身が察し給ふごとく、滝夜刃姫に紛れなし。われいささかも東の御殿おんじでんの、下知げちに従ひたりし身が、今おめくと董根が、手につき東の御殿おんじでんの為に、その恩をも報ひぬは、鳥獸けものにも劣るべしと、思ひまはせ



(16ウ・17オ 滝夜叉、浜名で捕らわれる)

ばしばらくは、仮にこの身を屈めつゝ、董根に仕へしは、まことは東の御殿の為に、害を除かん為なりき。しかるに運命拙うして、こと成らざりしをいかにせん。こは全く天の意にて、何ともせん術なき業よ」と、聞いて件の女房が、「此度御身の旅立ちは、何処をさして行き給ふ」と、問ふに滝夜叉答ふるやう、「我が故郷は下総なる、猿島に△△侍るかし。一まづ故郷に立帰り、近き国々はいふもさら也、およそ天下の人びとへ、東の御殿の御下知に、ことよせて董根を、討ち滅ぼすべき軍兵の、催促をなさんと思ふは、妾が心でありながら、此事成就しがたきをいかにせん。こも又次へ(16ウ・17オ)／続

き)天の、なせるわざにてあらんずらん」と、吐息を吐くにかの女房は、此ことを聞くと等しく、自ら立ちて滝夜叉が、縛めの縄解きほどこき、その手を助けて■／■上座に、敬ひかしづき又立ちて、酒肴を自ら携へ、出でて滝夜叉に勧めつゝ、礼厚くして言ひけるは、「御身は東の御殿にとりては、忠義の人といふべきのみ。願ふは妾御身に従ひ、共に御殿へ忠義をせん」と、言へば滝夜叉か



(17ウ・18オ 宮居、滝夜叉と共に旅支度する)

の女房が、まづ名を聞かんと尋ぬるに、かの女房□／□答へて言ふやう、「妾は名を宮居【陳宮】と呼ばれて、上総の国^{つしまの}の者なるが、故ありて都に上り、宮仕へをし侍りしが、此度^{こたび}此役儀^{かつかぎ}を蒙る。老母・夫は故郷にあり、道のついでにもよきものから、御身と共に東路^{あづまぢ}へ、帰りて共に大事を計らん。まづ身構へをなし給へ」とて、宮居は秘かに支度を整へ、大方に果てたれば、夜をこめて、此関所を立ち退き、うち連れ立ちて東路^{あづまぢ}の、故郷^{ふるさと}さして辿るにぞ、はや菊川に來にけるが、その日も暮れに近付きぬ。

滝夜叉は彼方^{かなた}なる、深き林の内を指ざし、「彼処^{かしこ}は妾が兄上なる、御厨^{みくりや}の三郎将頼ぬし【将門の弟】の、実母^{かじわき}柏木【呂伯奢】といふ人の、故郷^{ふるさと}にて侍るかし。彼もと父が側女^{そばめ}にて、兄将頼を儲けし後は、此菊川の故郷^{こけう}に帰りて、豊かといふにあらねども、世をいと安く送るよし。今彼処^{かしこ}に尋ねゆき、彼が安否を問ひ訪れ、今宵一夜を明かさばいかに」と、言ふを宮居が「そはよからん」と、言ふに任せて二人とも、門辺^{かどべ}に至りて案内^{あない}を乞ふに、内より一人の媼子^{むすこ}立ち出で、「何処^{いづく}より來ませしぞ」と、



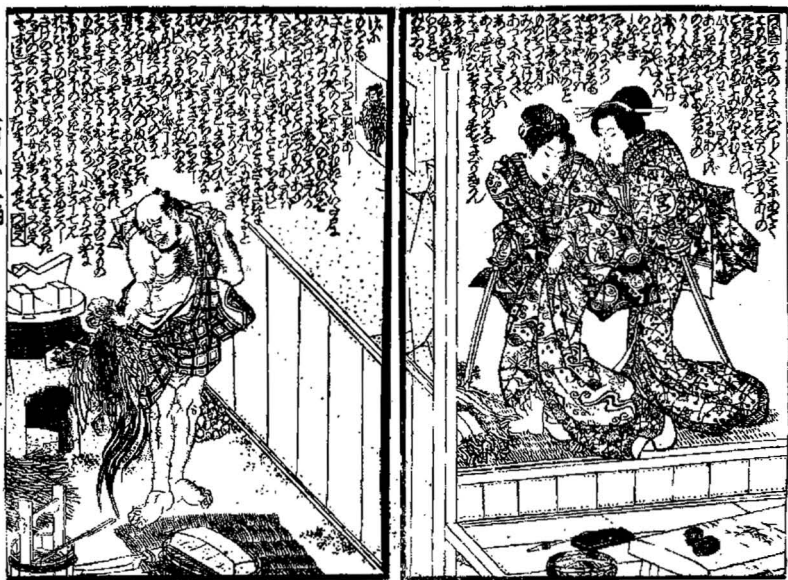
(18ウ・19オ 滝夜叉・宮居 柏木を訪ねる)

問ふに滝夜叉云々の、者なる由を■／■言ひ入るゝに、
 彼方には主の柏木、ことの由を漏れ聞てや、疾しや遅し
 と走り出で、二人を奥の一間へ請じ、絶へておとづれせ
 ざりしを、かたみに詫びつ詫びられて、またこなたなる
 宮居にも、一通りの口詮終はりて、柏木が言ひけるは、
 「妾この頃ほの聞くに、今都にては絵姿を、諸方へ配り
 て滝夜叉主の、ありかを厳しく探さるゝよし、此わたり
 までも聞こえたり。しかるを御身恙なく、こゝへ来ませ
 しは訝し」と、言ふに滝夜叉うちほう笑み、「前のこと
 は次へ(17ウ・18オ)／続きかやうく、今の上はしか
 くなり」と、ありしことゞも詳しく語り、此度の事は
 これにます、宮居の主の骨折りにて、偏に助かりたるよ
 しを、物語れば柏木は、宮居をいたく敬いて、「御身が
 助けにあらざりせば、今日の対面はかなひがたし。これ
 偏に御身が賜物、さなき時は滝夜叉姫が、一家一門残り
 なく、此度のついゑに滅びなん。あゝ危うかりしことな
 りし」と、言ひつゝ此方の滝夜叉に、うち向かひてまた
 言ふやう、「御身はしばらく宮居主と、物語しておはせ

よかし。妾は家によき酒の、蓄へたるを切らしぬれば、此里外れの酒屋に至りて、一樽をあつらへ来たり、宮居の刀自をもてなしてん」と、**右へ**／＼**左より**聞いて宮居はおし止め、「そは思ひがけなきことなりき。妾は酒をえ飲まねば、心配りは置きてたべ。益なきことに骨折らし、参らするが気の毒也。**下へ**／＼**中より**とくく止まり給へかし」と、辞するを柏木聞入れず、「必ず暇は取らずまじきに、辞退し給ふことにはあらじ。今宵一夜を我が方に、とゞまり給ふものなるを、いさゝかのもてなしせざらんや。さは言へ実^{いなかま}に田舎酒の、お口に合ふか合はざるかは、知らねど勧めまゐらせん。更闌^{かうた}けぬ間に一走り」と、言ひつゝ厨^{くちや}の方^{あた}に入り、何にかあらん僕らに、うち囁きて自らは、里外れまで出でて行く。

滝夜叉宮居とさし向かひ、物語してゐたりしが、しばらくありて**次へ**（18ウ・19オ）／＼**続き**厨^{くちや}の方に、ごつし／＼と砥^とに当てて、刃物を研ぐ音聞こえたり。傷持つ足の滝夜叉は、此物音を聞つけて、声を潜めて宮居に向かひ、「此柏木は妾がために、厚き親族といふにもあらず。

逃れぬ仲にてもなきものから、今慌てたる面持ちにて、酒買ひに出でたるは、いと疑はしきわざならずや。そが上に厨にて、何か僕に囁きしは、此方二人のことなるべし。僕小者を使身が、自ら酒をあつらへに、軽々しく行く道理はあらず。これ疑ひの甚だしき也。秘かに様子を探り聞かん。しか思し給はずや」と、言はれて宮居も「げにもつとも」と、共にうち連れ抜き足差し足、厨の方に赴きて、板戸に耳を押し付けつ、内にて人のもの言ふを、心をつけてうち聞くに、「絞め殺さんか、打ち殺さんか」と、独言^{ひとりごと}つ者のあり。滝夜叉は我が胸に、ひしと当たれば頬ふくらし、小膝をはたと打ち鳴らし、「果たせるかな此たくみあり。諺に、先にすれば人を制し、遅るれば、人に制せらるといふことあり。まづ此方より手を下さずは、必ずしも擒^{かち}となり、遂に都へ差し出だされ、董根が為にあたら命を、落とさんは口惜しかるべし。いざもろ共に」と宮居を進め、用意の脇差手早く抜き連れ、まづ奥の間に団居せし、五三人の奴婢らをば、男女の嫌ひなく、あなたを斬りこなたを殴り、やにはにそ



(19ウ・20オ 滝夜叉ら、柏木の家人を斬殺する)

こへなき倒す、その数全て八人に及べり。「いまだ生き残る者もや」と、二人はあたりをかゝぐりぐり、小部屋より厨に赴き、影ほの暗き灯火に、透かして見れば一人の男が、鶏を絞め殺し、酒の肴に調せんとの、心構へをするなりき。件の男は二人の女が、白刃を携へたゞずみしを、見るより魂消へ失せて、次へ(19ウ・20オ)／続き慌てふためき逃げ去りけり。滝夜叉此時様子を悟り、「絞め殺さんか打ち殺さんか」と、独言ちしはこの事なりしを、妾は悪しく取り違へし」と、はたと横手を打ちしかば、宮居は後悔の色をなし、「御身が心の僻みより、多くの人を誤り殺せり。いと罪深きことにこそ」と、言へば滝夜叉「今更に、言ふて帰らぬ悔やみこと。主柏木が△／△帰らぬはしに、急ぎてこゝを立ち退かん。猶予すべき場所ならず。とくく」と促したて、取るものも取りあへず、足をはかりに逃げ出でたり。

二人の女は走ること、いまだ一町にも至らぬ折から、柏木は彼方より、酒樽に川魚取り添へて、自ら■／■これを引提げつ、二人が様子を透かし見て、声振り立て



（20ウ 柏木、帰り来たる）

國貞画 雪麿作 金川書

て「やよ二方は、いかにしてか我が方に、泊るともせで何処へか、至り給ふは訝し」と、声かけられて滝夜叉が、「こは生憎」と思へども、避けんやうこそなかりけれ。二人ともに東の者ゆゑ、故郷へ帰らばかの名代の、江戸京橋の坂本の、美艶仙女香と美玄香を、たくさん求めてよい便りに、こつちへ下してもらひませう。とんだよい薬白粉だ。

《第二冊 後表紙封面》

天保三壬辰年孟春發行新神史		墨川亭雪麿作 孫彦 傾城三国志全編全冊	
西國 五柳亭徳外作 奇談 月夜神樂全六冊	復讐 相宿新全冊	傾城 三國志全編全冊	孫彦 古本抄全冊
松若 墨川亭雪麿作 櫻娘 繪見新全冊	墨川亭雪麿作 復讐 相宿新全冊	傾城 三國志全編全冊	孫彦 古本抄全冊
漢齋 英泉画 奇談 月夜神樂全六冊	墨川亭雪麿作 復讐 相宿新全冊	傾城 三國志全編全冊	孫彦 古本抄全冊
五柳亭徳外作 奇談 月夜神樂全六冊	墨川亭雪麿作 復讐 相宿新全冊	傾城 三國志全編全冊	孫彦 古本抄全冊
漢齋 英泉画 奇談 月夜神樂全六冊	墨川亭雪麿作 復讐 相宿新全冊	傾城 三國志全編全冊	孫彦 古本抄全冊
五柳亭徳外作 奇談 月夜神樂全六冊	墨川亭雪麿作 復讐 相宿新全冊	傾城 三國志全編全冊	孫彦 古本抄全冊
漢齋 英泉画 奇談 月夜神樂全六冊	墨川亭雪麿作 復讐 相宿新全冊	傾城 三國志全編全冊	孫彦 古本抄全冊
五柳亭徳外作 奇談 月夜神樂全六冊	墨川亭雪麿作 復讐 相宿新全冊	傾城 三國志全編全冊	孫彦 古本抄全冊
漢齋 英泉画 奇談 月夜神樂全六冊	墨川亭雪麿作 復讐 相宿新全冊	傾城 三國志全編全冊	孫彦 古本抄全冊

▼奥目録「天保三壬辰年孟春發行新神史」。右上に本作第三編、下段に第四編が掲出される。しかし、この年実際に刊行されたのは、今回紹介した第三編上帙のみで、下帙の刊行は翌年に持ち越された。

（かんだ・まさゆき 法学部准教授）